

NO-MA 2024.2 / VOL.33

ボードレス・アートミュージアム  
NO-MA ニュースレター

展覧会レポート① 並行世界の歩き方 上土橋勇樹と戸谷誠

Topic of NO-MA 「ユニバーサル」な「アート」を体験できる場  
《Love Stone Project - NO-MA》

展覧会レポート② 触の祭典「ユニバーサル・ミュージアム さわる!めぐる物語」  
なぜ、「さわる」ことが、ユニバーサルなのか

地域インタビュー あのひとつの近江八幡スタイル  
おつみ福祉会 おつみ作業所・きみいろ 統括施設長 野村 真愛さん

# 展覧会 レポート①

文：横井悠(本展担当学芸員)

並行世界の歩き方  
上土橋勇樹と戸谷誠



2023年7月29日(土)～9月18日(月・祝)

(主催) ボーダレス・アートミュージアムNO-MA  
社会福祉法人グロー～生きることが光になる～

(後援) 滋賀県、滋賀県教育委員会、  
近江八幡市、近江八幡市教育委員会

(協力) 近江八幡観光物産協会、しみんくし滋賀、  
マエダクリーニング仲屋店、やまなみ工房

がお茶らけているが、その存在が彼女らの視界に入ることはない。「どのよう絵になるかは、描いてみないとわからない」戸谷は60年にも及ぶ画業のなかで、刹那的に現れる脳内イメージを描き続けてきた。それらは彼のアトリエで

カチカチカチカチ……、PCをタイピングする音声に誘われて暗い展示室に足を踏み入れると、突如デザインイメージやタイプボラフィなど数多の情報が目に飛び込んでくる。壁面を覆う印刷物。その上に投影される元データや音。さまざまな要素が重なり合うことで複雑なレイヤーやリズムを生み出し、まるで現実と並行して存在する別世界に迷い込んだかのような感覚を呼び起こす。

それらのデータはすべて、キーボードを打つ人物である上土橋勇樹によるもの。彼は小学生のころにPCと出会って以降、今日に至るまで、現実にはない架空の洋書の表紙デザインや人名を羅列したタイプグラフィックなどを作り続けてきた。その制作スピードは凄まじく、PCのハードディスクには、過

去に作られたおびただしい数のファイルが蓄積・管理されている。本展では会場中央にモニターを設置し、上土橋が実際に使用するPCをオンラインでつなぎ、制作の瞬間をライブで公開した。作る過程を知り、会場をめぐることで、過去から現在へとつながる上土橋の一貫したスタンスや、留まることなく拡張し続ける世界の在りようが少しずつ浮かび上がってくる。

デジタルネイティブ世代らしい上土橋の1階展示室とは対照的に、2階展示室では戸谷誠の肉筆による絵が空間を明るく彩った。戸谷作品の多くは、幻想的な風景をバックに、女性たちが穏やかな微笑みを浮かべる。彼女らはときに4つの目を持ち、ときに後光が差すなど、絵のなかで象徴的に描かれる。その周りでは得体の知れない生き物

山のように蓄積している。また日々多くの作品を描く一方、戸谷は何年もかけてそれらの複製や加筆修正を行う。それが特に如実なのは絵巻物の制作だ。過去に描いた図柄を部分的にトレースすることを繰り返し、トレースした図柄と図柄の隙間を別の要素でつなぎ目なくなじませるという方法で、これまで61巻の絵巻物を制作してきた。1968年に描き始めた第1巻の修正は今もなお続いており、その制作に終止符が打たれることはおそらくない。

本展では、上土橋勇樹と戸谷誠という二人の作家を、「並行世界II パラレルワールド」への2通りの導き手として紹介した。この二人は作風も表現方法も対照的だ。しかし、根本的な部分で通底していると感じる。それは現実とは異なる場所にもう一つの世界を作り、拡張し、そして決して終わらないこと。そんな彼らの作品を観るという行為は、きつと彼らが遊泳する各々の宇宙空間を、スペースシャトルの分厚い窓ガラス越しにただ静かに眺めるようなものなのだろう。誰のものでも誰のためでもない一人だけの表現。上土橋と戸谷による果てない制作の歩みは、「私たちの内にも並行世界がある」と想像することを許してくれる。



上土橋勇樹の展示風景  
展示チーム：株式会社デンキトンボ、西野裕貴、横井悠



戸谷誠の展示風景



びかびかに磨かれたLove StoneはNO-MAの中庭に展示しています

場でした。「ただ磨くだけでいい」というのも、それまでアートに触れてこなかった人や、敷居の高さを感じていた人たちにとって、アートとの距離がぐっと近くなるきっかけになった気がします。

「ユニバーサル」な「アート」、そして「アート」を「ユニバーサル」に。そんな2つの意義を感じられるイベントになったのではないのでしょうか。皆さんが磨いたこの石はNO-MAの中庭に飾られています。磨いてくれたみなさん、ぜひ「これ、私が磨いたやつ」と言いNO-MAに来てくださいね。お待ちしております。

ざらした感触で、本当にこれがつるつるになるのかと思うほど。イベント当日、富長さんは石を磨きながら「石磨きおじさんです！一緒に石磨きませんか？」と道行く人に声をかけていました。「石磨きおじさん」に声をかけられて戸惑う人もいましたが、「石を磨く」という言葉に子どもたちが興味を持って参加してくれました。やすりに水を付けて夢中で磨いている姿を見て、大人も「やってみよう」と少し遠慮がちに磨き始めます。「これ、終わりがわからないですね」と笑顔を見せてくれる人もいました。他にも「最後はこの石がつるつるになりますよ」と聞いて興味を持つ人、磨きはしないけど見ている人、1歳の赤ちゃん、旅行で来ている大学生、「1回目楽しくてまた来ました」と2回目にも参加してくれた人など。いろいろな人が石のまわりに集まって一緒に磨いている光景は、性別、年齢、障害の有無などを問わず、「誰でも」参加できる、まさに「ユニバーサル」な「アート」を体験できる

の人たちと一緒に、その土地の石をつるつるに磨くプロジェクトです。今回は全3回の企画で1回目と3回目は地域に根付いたマルシェ「スワイバザール」で開催しました。展覧会の会場であるまちや倶楽部に置かれていた杵石を使用しました。まちや倶楽部は、古い酒蔵を改装した複合施設で、酒造りで使用した石が当時のまま残されていました。イベントをする土地の石を使うのも、Love Stone Projectの特徴の一つです。富長さんが加工して少し縦長のハート型になった石は、さわるとかなりごつごつ、ざら

触の祭典「ユニバーサル・ミュージアム さわる!めぐる物語」の関連イベントとして「ギャラリーツアー」、「映画『手でふれてみる世界』上映会&アフタートーク」、「音にさわる演奏会」、「Love Stone Project — NO-MA」、「自分だけの鈴をつくろう」、「NPO法人しが盲ろう者友の会と学生とともにつくるワークショップ」の6つを開催しました。そのなかで「Love Stone Project — NO-MA」についてお伝えします。

Love Stone Projectは作家の富長敦也さんが世界中の様々な土地に赴き、その土地



文：山邊まみ(自立生活支援員)

1つの石のまわりに集まる人たち

## ノマ Topic of NO-MA トピ

「ユニバーサル」な「アート」を体験できる場  
《Love Stone Project — NO-MA》

# 展覧会 レポート② 特別インタビュー

〈ユニバーサル・ミュージアム展監修者〉  
広瀬 浩二郎(国立民族学博物館 教授)

〈聞き手〉石田 瞳  
(社会福祉法人グロー/本展担当者)

〈編集〉赤澤 誉四郎(社会福祉法人グロー)

触の祭典「ユニバーサル・ミュージアムさわる!めぐる物語」  
2023年10月7日(土)~12月17日(日)

〈主催〉ボーダレス・アートミュージアムNO-MA  
社会福祉法人グロー~生きることが光になる~  
〈後援〉滋賀県、滋賀県教育委員会、  
近江八幡市、近江八幡市教育委員会



2023年秋、NO-MAでは2021年に国立民族学博物館で開催された「ユニバーサル・ミュージアムさわる!」触の大博覧会のコンセプトを継承し、「触の祭典「ユニバーサル・ミュージアムさわる!めぐる物語」展を開催しました。ここでは、本展監修者の広瀬浩二郎さんへのインタビューの一部を掲載します。

## なぜ、「さわる」ことが、ユニバーサルなのか

**石田** 本展では作品をすべてさわることができません。なぜ「さわる」ことがユニバーサルなのでしょう?

**広瀬** 視覚障害者の僕が「ユニバーサル」というと、「これは障害者対応なんですか?」と思われがちです。そうすると、「視覚障害者対応だけでいいんですか?」と言われる。僕は障害種別に対応したユニバーサルを実現することは考えていなくて、視覚障害者発の「ユニバーサル」をずっと提案しているんです。聴覚障害版のユニバーサル、肢体不自由の人が提案するユニバーサルなど、いろいろなユニバーサルがあることが自然だと思えます。

人間には五感があるといわれ

るけれど、目、耳、鼻、口はすべて顔に集まっている。一方、触覚は全身に分布しています。足でさわってもいいし、体でふれてもいい。僕は、「触覚」を説明するとき、あえて「触角」という字を使うんだけど、人間って本来、真っ暗な夜道でも灯りなしで歩けるとか、全身に触角(=センサー)を持っていたはずなんです。それが、便利な時代になって、センサーを使わなくなっちゃった。進化の歴史のなかで失ったものがたくさんあるんです。ちょっとと壮大な話ですが、そのセンサーを取り戻すのが、ユニバーサル・ミュージアムだと考えています。

**石田** 今回、ユニバーサル・ミュージアム展がNO-MAで開催された意義を教えてください。

**広瀬** NO-MAのコンセプトは、僕が追求してきたユニバーサルとすごく近いものがあると感じています。展覧会では、その土地、その空間にあった配置をするわけですが、町屋を改修した空間に横井学芸員が本当に上手に作品を展示してくれました。靴を脱いで、なんだか親

しいお友だちの家におじゃまして、ちょっとおもしろいものをさわらせてもらっているような感覚。作品の新たな魅力が感じられました。

今回、特に大切にしたこと、会場の一部を暗くするということがあります。視覚優位ではなく、触覚優位になってほしいと思います。否応なく触覚に集中できる環境をつくりました。でも、暗い場所だけの展示だと、「非日常の体験をした」で終わってしまい、また視覚中心の生活に戻ってしまいます。明るい状態でも作品をさわってもらって、理想としては、「見るのもいいね、さわるのもいいね、両方で鑑賞すると楽しいな」となってほしい。非日常と日常をつなぐという意味で、明るい場所での体験を最後に入れるというところは、僕なりにこだわった部分なんです。



インタビューのロングバージョンは、「NO-MA YouTube チャンネル」にてご覧いただけます。

▼ 作品解説をする広瀬浩二郎さん



## 地域インタビュー ohsi-hachiman local interview

地域の人たちが気軽に訪れる作業所を目指して

社会福祉法人 おうみ福祉会  
おうみ作業所・きみいろ 統括施設長 **野村 真愛** 氏  
のむら まさよし



1987年に開所したおうみ共同作業所は、当時から重い障害のある利用者が多く通う障害者支援施設でした。野村さんが初めて作業所を訪れたのが25歳のとき。当時は火葬場のふもとでときどき灰が舞うような環境にあり、「21世紀にもなろうというこの時代に、なんちゅう場所や!」と衝撃を受けたそうです。

「転職の選択肢はいろいろありましたが、おうみ作業所が気になった理由がふたつ。ひとつは利用者の障害がすごく重かったけどみなさん大変明るく笑顔いっぱいだったこと。なんか、ほっとけへん、ここに加わりたくなって気持ちになって。もうひとつは、この奥まった環境を出て、近江八幡の地域の中に行かせてあげたいなって思ったことです」

1998年、おうみ作業所に転職すると、2002年には現在の岡山学区への移転がかないました。小学校の目の前に作業所があることは、とてもめずらしいことで、地域の人たちの理解と、

懐の深さを感じたといいます。「皆さんにはすごく感謝しています。地域のことにはなるべく参加したいと思っているし、いろいろな形で恩返しせなあかんと思っています」と野村さん。

現在、おうみ作業所として積極的に取り組んでいる活動のひとつに、岡山小学校との交流があります。4年生に向けたふるさと学習にゲストティーチャーとして招かれたり、先生と一緒に地域の発展について話したりします。「3年生との交流は10年以上続いています。作業所とは何か、どんな人が利用しているのかなどを話した後、必ずおうみ作業所の見学会、体験会をやります。利用者さんとの名刺交換会はお互いのことを知り合える大切な時間です。「好きな食べ物はハンバーガーです」とか書かれたカードを直接交換することで、ざっくりと“障害者”じゃなくて、個人と個人が向き合った関係が生まれます」

子どもたちからは「なんで、あんなに動き回ってはるの?」「治らへんの?」

など純粋な質問が出ます。小学校3年生ぐらいの年齢が、「かわいそう」などの感情を挟まず、人として、ピュアにかかわりあえる一番いい時期だそうです。

野村さんがおうみ作業所に転職して25年、施設長になってちょうど10年がたった2023年、「Den-en Kitchen」というカフェを併設した2つめの作業所「きみいろ」が誕生しました。「特殊浴槽や天井走行リフトなど、医療ケアに対応できる施設の必要性を感じたこともあるのですが、地域の人たちが気楽に来てくれる作業所にしたかったです。カフェや多目的室を地域の人に使ってもらって、ワークショップなどもやってほしい。きみいろがコミュニティの中心となって、気が付いたら『あ、ここ作業所やったんですね』という感じになったら、しめしめですね」

作業所の利用者を「仲間たち」と呼び、おうみ作業所で働く人たち、仲間たちの魅力を、もっと地域の人に知ってほしいと願う野村さん。「ふれあうことで、ハッピーで人にやさしい町になるんじゃないかな」。きみいろの開設をきっかけに、地域との交流がより一層深まっています。



「Den-en Kitchen」を楽しむ地域の皆さん (2023年12月)

## 近江八幡 スタイル

あのひとの

「きみいろ」カフェスペース (2023年5月開設)



## &lt;NO-MAグッズのご案内&gt;

作品のメモ帳やトートバッグなど、NO-MAのミュージアムショップやホームページからお買い求めいただけます。



トートバッグ  
1,000円



メモ帳  
380円

## &lt;NO-MA企画展グッズのご案内&gt;

2023年7月29日から9月18日まで開催した企画展「並行世界の歩き方 上土橋勇樹と戸谷誠」の図録を、NO-MAおよびNO-MAホームページにて販売しています。また、過去に開催された展覧会の図録や関連書籍、ポストカードなども取り扱っています。ぜひ、お求めください。



並行世界の歩き方  
上土橋勇樹と戸谷誠  
〈価格〉1,500円(税込)  
〈ページ数〉52ページ  
〈サイズ〉22.5×28.0cm

NO-MA次回企画展  
「Borderline」

「borderline ボーダーライン」という言葉には、「境界」「境目」という意味があると同時に「どちらともいえない」「曖昧な」といった意味が含まれています。本展では、美術作品を作ろうとせずしてできた作品や、形状は使用用途を思わせるのにその用途がない作品、また自分が使用するためだけに作ったものが美術作品として評価を得た作品や、使用用途を無くして作品にしてしまったものなど、用途とは何なのかを問いかけてくる作品を展示します。

2024年3月9日(土)～6月16日(日)

11:00～17:00 月曜休館(祝日は開館、翌平日休館)

会場: ボーダレス・アートミュージアムNO-MA

観覧料: 一般300円(250円)、高大生250円(200円)

中学生以下・障害のある方と付添者1名無料

※( )内は20名以上の団体料金

〈主催〉ボーダレス・アートミュージアムNO-MA、  
社会福祉法人グローパー(GLOW)～生きることが光になる～  
〈後援(予定)〉滋賀県、滋賀県教育委員会、近江八幡市、  
近江八幡市教育委員会

〈協力〉近江八幡観光物産協会、しみんふくし滋賀、  
マエダクリーニング仲屋店

〈出展者〉山田浩之、高丸誠、下田賢宗、山ノ内芳彦、  
臼井明夫、山崎菜那、株式会社ジオ

## 【NO-MA館長のつぶやき】 大西暢夫

2023年の夏、カメラマンであるこの僕が、ボーダレス・アートミュージアムNO-MAの館長になった。数か月前からそんな話があったが、聞き流していた。組織に属することが初めてで、戸惑いしかなかったからだ。

まだアール・ブリュットという言葉が馴染みのない時代。当時は障害者アートやアウトサイダーアートと呼ばれることが多かった。そのころから、絵や陶器の作品などの写真を撮り続けていた。小さなものから、重たくて、2人がかりでしかスタジオに運び込めないものまで、次に何が来るのか予想すらできないものが次々と目の前にやってきた。撮影するのも、そのたびに設定を変えなくてはならなかったから、「作品に大きさや素材の定義を作ろう！」なんて、ジョークを言いたいほどだった。

アウトサイダーアートからアール・ブリュットという言葉が主流になり、今や福祉業界だけでなく、いろいろな人たちが交わるようになったことは、大きな広がりだったと思う。人を動かすエネルギーが、これらの作品にはあったんだと実感した。言葉を世間に定着させてきたNO-MAの役目は大きかった。その先導役だった絵本作家のはたよしこさん。彼女の存在があったからこそ、方向性も明確だったし、作品として世に旅立っていったのだと思う。

館長をやるからには、はたよしこさんに会うしかない、スタッフとともに8月に会いに出かけた。はたさんとは、作家や作品と出会うために日本中を駆け巡った。移動中の電車の中で、ビール片手に作家の魅力を語る。作品を目の前にすると赤信号でも飛び出すような無邪気な姿は、忘れられない。

そんなはたさんが、引退され数年。自宅近くで会い、しばらく横に座り、話し続けた。「はたさんが築いてこられたNO-MAを、僕が引き継ぐことになったのですが、いいですか？」そんな会話をした後、か細い声で「大西さん……」と、返ってきた。言葉を滅多に発しないはずのはたさんだったが、この一言に、すべてを受け入れてくれたんだと、涙腺が熱くなった。

新人作家を掘り出すことばかりがNO-MAの役目ではないということも思っていた僕は、作家やその家族を見守り続けることも役目ではないかと感じていた。障害と向き合う先に、アートがあると信じ、それを生み出した家族や生活環境を見続けることが、まさに社会福祉法人が運営する美術館なのではないかと思う。そんな希望を持ちながらアートが持つ力をNO-MAという場で続けたい。

組織には未だ馴染めないが、少しずつ慣れていこうと思う。

ボーダレス・アートミュージアム NO-MA



滋賀県近江八幡市永原町上16

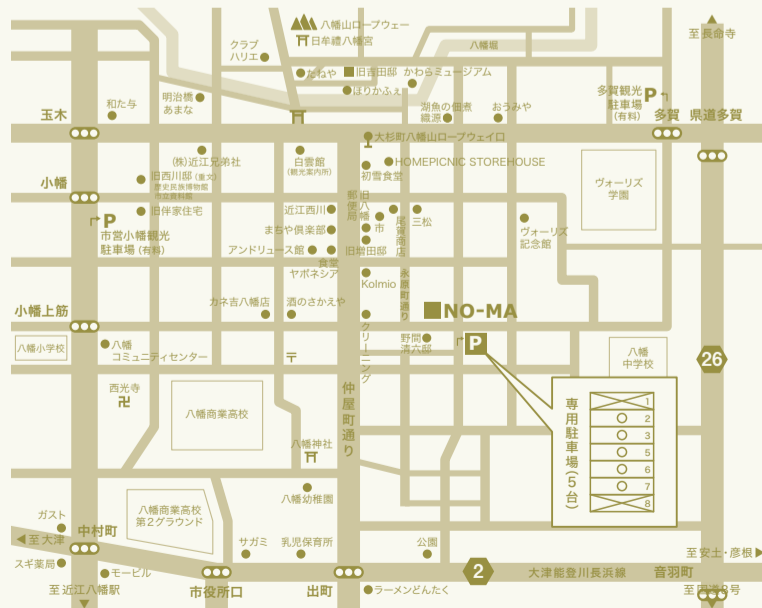
TEL/FAX 0748-36-5018

休館日：月曜日

(月曜日が祝日の場合は翌平日休館)

E-mail no-ma@lake.ocn.ne.jp

https://no-ma.jp



## Access アクセス

- バス JR近江八幡駅から近江鉄道バス(長命寺行き)大杉町八幡山ロープウェイ口バス停下車徒歩8分。
- 車 名神高速道路・竜王ICより「近江八幡・国道8号」方面へ。国道8号「西横関」右折、「東川町」左折。国道2号「小船木町」右折、「出町」左折。(計30分)
- 自転車 JR近江八幡駅から徒歩30分、自転車10分。

NO-MA公式サイト  
https://no-ma.jp/公式Facebook  
museumnoma公式Instagram  
@museum\_nomaNO-MAアーカイブ  
https://no-maarchive.com/公式X(旧Twitter)  
museum\_nomaNO-MA YouTube  
チャンネル

NO-MAでは、ホームページでの情報発信に加えて、SNSを活用した情報発信も行っています。